
Dreaming Realism

岩崎星空羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D r e a m i n g R e a l i s m

【Nコード】

N 2 0 2 9 G

【作者名】

岩崎星空羅

【あらすじ】

「現実しか見えなくて何か不自由でも？」そんな少女がある日突然、違う次元へ。失くした友人、消えた事実。それが全てその次元に散らばってる——はず。

序章：夢の中の記憶

れなちゃん、夢はね、創造するんだよ？

———ばか、夢なんて見てもあんたの言うように創造したって所詮は『夢』でしかないの。わかんないの？

違うよ！ 夢は自分で生み出せるの、そう考えなきゃ面白くないでしょう？

———別に面白さなんていらない。あんたが夢見すぎなのよ。いい加減現実見れば？この点数、何よ

わわわっ、私の算数のテスト！ 返してええっ。

ピピピピ・・・

目覚ましの音で私は夢が覚めた。

そっくりそのまま、過去を映し出した私の夢。

過去なんて見ないわ、なんて周りにいっておきながら結局時々こういう夢を見て追い詰められる。

追い詰められる、なんて表現は悪いかもしれないけど。

語彙力がないから仕方がない

と終止符を打ち現実を見ようとする。

リアリズム、らしい私は。

七川雛霧がいうならば。

七川雛霧、私によく付きまどってきた小学校の頃の友人。

夢見がちで、よく自作の小説を私に聞かせては嬉しそうに語ってた。

今は、彼女もいなくなった。

中学生二年の夏。いつものように暇を満喫するためにテレビをつけてニュースを見ていたとき突然そのニュースは流れた。

『七川雛霧さん（14）が昨晚、一通の手紙を残したまま行方がわからなくなっております。』

そんな内容だった気がする。もう曖昧になってしまったけれど。

当時は、友人がテレビで流れていたことが新鮮でついニュースに釘付けになった。

今からよくよく考えればなぜ、女子中学生の行方が眩まされただけでニュースに取り上げられたんだろう？

しかも、一通の手紙、だ。

遺書、とは一言も言っていないのに。

手紙の内容なんてテレビじゃ放映されなかった。

もちろんプライバシーのことで、だと思っけれど。

彼女の母親は、ハンカチ片手に泣き泣きインタビューに応じていた。
そんな、中学生。

反抗期なんだから、家出かもしれないじゃない。

テレビにそう叫んだけど無論届かない。

わからない。

私は大人の思考回路が。

「れなー？ 貴女何してるの？ 朝ご飯、早く食べなさい！」

「今行くから片付けないでよね！」

下で母親が怒鳴っていた。

そんな声のおかげで私の意識は完全に現実世界へ引き戻された。

序章：夢の中の記憶（後書き）

新しく連載始めました！

最後までお読みいただき、有難うございます。

第一章：墮ちる前のひと時

朝食を食べ終わり、着替えもせずぼんやりとテレビをつけた。
まるであの日を再現してるかの様に――。

ニュースは、『今を乗り切る節約術！』という特集が放映されていて、あまり興味を引かれるものでもなかった。
けれど他にやることもないし、しばらくはソファに深く腰掛けてテレビを見ていた。

長い時間特集をやり終えると、政治の特集に入っていて。泥沼と化した政治の世界が映し出されていた。

――大人もちゃんと夢見なきや。

そんな、雛霧の声が私の脳に響き渡った。

そして、気付く。私はまだあの出来事を事実として飲み込めていないのかもしれない。

雛霧に限って家出なんてないと思う。お小遣い制じゃなかったらしいし最も家出する理由が見つからない。

小学校を卒業したつきり会ってはいけなければ、中学に入っすぐに何か劇的な変化があるなんて到底思えないし。

結局私にはわからないってことなのか。

視線がいつのまにか足元にいつていたので、テレビへと戻す。

時間が変わったからなのか、もう違う番組だった。司会者たちのトークが弾んでいる。

ああ、もうなんだかどうでもいい。

もやもやが止まらない。

Trrrrrrr.....

「お母さんー？」

何度か名前を呼んだけど返答がない。そうか、もう出かけてしまったのか。

もともと、人と喋るのは好きじゃない。寧ろ嫌いに属してもいいほど。

「はい、山梨です」

「れな！？ ほら、覚えてる、小学校のあんたがよく話してた雛霧ちゃん！ あの子のいる病院がわかったの。今からいうからいってあげるのよ！」

ひな、む？

まるで、示し合わせたかのように雛霧の名前を出すものだから受話器を落としそうになる。しかも病院？ 意味がわからない。

なんで雛霧が病院に入院なんてしてるんだろうか。

手がだんだん汗ばんで受話器が本当に床に落ちそうになる。

いってあげるのよ、絶対。

その言葉を残し母親は一方的に電話を切った。何かものすごく焦っていたけどなぜだろ？



雛霧のいるという病院は真新しい病院で広くて結構迷いそうになる。

母親から教えてもらった病室へ足を進める。廊下を歩いているときに、叫び声や雄たけびが聞こえて少々怖気づく。

てつきり、内科か外科かと思ったのに精神外科なんて。

まるで雛霧が中学生になって精神異常者になったかのような。

いや、小学生の頃からあの思考回路は私にとっては精神異常者同然だったけれど。

618号室。

一番奥の部屋だった。物音ひとつしない部屋。

どうやら、一人部屋らしい。さすが金持ち。

軽くノックをして部屋に入った。カーテンが閉められていてなんだか暗い。

「雛霧？」

呼びなれたはずの名前なのに、どうしてだかきこちなくなってしまうのは月日が流れすぎたからという理由をつけておく。

部屋の隅に置かれているブーケの中の花のひとつが枯れかけていた。あんまりお見舞いに来ないのかな？ そんなことないよね、雛霧友達多そうだし。

ベッドに近づいてみて小さく驚いた。

髪の毛がものすごく長い。

小学生の頃もとても長かったのだが、今はその倍近くある。

目を覚ます気配さえない。

すやすやと眠っていて、微塵も動かない。そんな雛霧の様子を見ているとこっちまで眠気に誘われうとうとしだしてしまう。

仕方がない。

もう睡魔に勝てないし、いつか雛霧が起きるかもしれない。そしてら直で話せるし…。

よし、そうしよう。

意識に別れを告げて私はゆっくり夢の中へ引き込まれていった

―メイド的自己紹介

「――さん、……れなさん！」

煩さで目が覚める。

さつきからしきりに私の名前を呼ぶ人。遺族？ いやまだ雛霧は死んでないか。じゃあ両親とか？

だって、私の名前知ってるなんてそうとうなもの。

ぼんやりと目を開ける。

そして真っ先に私の視界に飛び込んできたのは、メイド服に箒を持ったメイド(?)だった。

生でメイドというコスプレや職業とやらを見た事ないから疑ったが、これはまさしくメイドだ。

メイドの他なんと表現していいか分からない。

けど何でこんなメイドが私の名前を知って尚且つここにいるんだろうか？

「ふふ。起きました？ いらっしゃいませ、夢の国へ」

「は!？」

「だから、夢の国なんですよここは」

改めて辺りを見渡してみる。
さっきは眠かったからと、自分自身に言い訳をする。

ありえないだろ！

見渡してみて、周りは全て木。そしてずっと向こうの方には大きい城。

昔、雛霧に見せられた本の挿絵みたいに。

「夢の国って何よ！ 病室は！？ 雛霧はどこよ！」

「夢の国の説明は特にありませんわ。説明する事がない、と申した方がいのでしょうか？ 実際体験した方がいいかと。

そして、病室のある病院はあちらにあります」

雛霧の居場所は教えないのか

ああ、分かったよ。全く分からないけど。

大体何よ。誘拐？ 誘拐よねこれ。

「ああ、もう何よこれ！ 夢の国って何？ 私の見てる妄想？」

「あなたは妄想なんてするのですか！？」

「しないわよ！ というかあんた誰よ！」

「申し訳ございません。私は、レイ||ナナルージュ。覚えにくいですが、どうぞよろしくお願いいたしますね」

……

凄い名前だ。日本人じゃないのか？ 見た目は茶髪ロングでどこにもいそうな人だけど！
何で外国名なんだ！？

……さすが夢の国というか。なんというか。言葉に出来ないよ。

「あの、で結局ここで病室はどこへ消えたのよ？」

「知りませんわ、全く。とりあえず貴女はここで生活してもらいますね。とりあえず家探しと行きますか」

——は！？

一体何が起こってるんだろう。

私は、レイに手を引かれて歩く。

家探しって、私はこの国に住み着かなきゃいけないの？

ちよっと待ってよ私まだ未成年よ

かなりヤバイじゃない。何で生活しなきゃいけないのよ！

「レイ？ ねえ、一体どうなってるのよ」

「どうなってるとはどういうことでしょうか？」

どうなってるって……。

だから私がここへ来た経緯よ。でも言っても無駄なんだろう。わか
ってる。

最悪。

私の人生狂いまくった今日この瞬間。
あの時眠らなければよかったんだ。

——悔やんでも意味ないか。
よし脱出でもしてみるか。
方法分らないけれど。

――瞬間の孤独

――れなちゃん！ 見てみて新しい小説作ったの！ 読んで読んで

……よく作る気になれるわね。

――だってれなちゃんが読んでくれるから作る気になれるんだよ！ れなちゃんのおかげだって

私がいなかったら誰に読んでもらうつもりよ？

そういうと、雛霧は顔を伏せた。

そして、しばらくして見てるほうまで悲しくなるような笑顔を向けて、

――作って破いて捨てちゃう、かな？



「う、ここ！？」

「ええ、気に入りました？」

レイに案内されたのは、賑やかな住宅街的なものが並ぶところ。そこにある一軒を指差されて、どうでしょうかと意見を促される。

「気に入ったというか……」

「他にもあるんですが……どうします？」

どうします？

といわれても。私は自分の家がいい。ああ、何か無性に愛着がわいてきたよ自分の家に。

目の前にある家は確かに私の家よりは綺麗だ。新築だな、見た感じがすぐにわかる。

まあ、少々小さいが。

「よし、ここでいいですね！ 貴女様にぴったいですわ」

えええ。

どこがぴったりなのか。大体、中学生がここに住めと？ 一人で？

無理があるだろ。うん、ありすぎる。

そんなことを考えてるとぐいぐいと背中を押される、凄い強い力で。まさか、とは思ったけど振り返るとレイがいる。いや当たり前だが。レイにここまでの力があるとは。

「れ、レレレイ！ やめてよ、何すんのよ！ 訴えるわよ！？」

「ふふ、どこへ訴えるのですか？ 貴女様のいたところにある『警察』はここにありませんけど……」

こ、このやろー！！

ふざけるな、どこへ訴えればいいんだ。

そんなことをしているうちに私は、中にいた、家の。

香水、じゃないけどいいにおいがする。何だ？ このにおい。

それより、家具がある。凄いな、意外に。まるで人が住んでいたみたい……

「そんなことはありませんよ。貴女様が来ることを想定して家具を配置しましたの。ふふ、気に入りましたか？」

「え、私がここへ来るのは必然だったの？ そういう運命だったの？」

私とその言葉を言い終わって、気づく。

何であんなすんなりと、『運命』とか『必然』とか……。出てきたんだろう？

「ええ、必然です。貴女様がここへ来るのは必然の運命なんです。病院にいつて寝るのは絶対なる必然。

けれど、運命はここまででこれから先、この国でどのように生活するのは運命に縛られてませんわ」

よくわからなかった。
だけど、わかったのはここにくるのは私が言った通り、必然だったこと。

必然、か。

「じゃあこの家はれなさんの家なのでご自由にどうぞ」
「え、ちょ待ってよ！！　レイ、レイ？　レイ！？　おい、待てえええええっ」

レイはにこやかにお辞儀をした後、出て行った。
……私はこの国に一人きりだということかしら？
最悪だ。何でいきなり一人にさせられなくちゃいけないのよ。全く。

ため息をつき、家の中を物色することにした。

第二章：居場所の意味

外見からすると、小さく見えるのに案外なかは広かったりする。
うーん。

見かけによらないってこういうことなのか。

一通り、その与えられた家を拝見し終わり、やることも終わった。
せめて、小説とかおいてあったらいいのに。

何か……いらんスポーツ用品とかあるのにどうしてそういう気遣い
がないのかな？

まあ、常識を求めても仕方ないか。

外へ、出るか。

凄く怖いけれど内心は。だけどここに引きこもっても仕方ないし。
私がいた元の世界へ帰れるドアとかあるかもしれないし。いや、そ
んなのないことくらいわかってるのだけれど。
どうしても信じてしまう。

「うっわ、城デカっ！」

家を出て、住宅街らしきところを抜けて出たら一面原っぱ。

そしてその続き先には先ほど見た城。

いったいあんなデカイ城に何人住んでるのだろうか？ 私が考えても多分答えにはたどり着かないけど。

何気なく空を見上げてみる。

私が住んでいたところとは違って、空が遠く蒼い。空気も綺麗だし……。

だけど田舎、じゃない。

風が吹いて草が揺れる。

それが気持ちよくて、私は思わず腰を下ろした。

風はまだ止まない。異国へ迷い込んだ私までも歓迎されてる気がして悪い気にはならなかった。

「一人なの？」

そんな可愛げの声がして、私は振り返る。

にこやかに笑ってるミニマム少女。見たことあるような気がしたけど気のせい。

本当に小さい、桃色の髪の毛をした少女。同年くらい？ 幼く見えるのはきつと気のせい。

「誰よ、貴女。……この人？」

「そーだよ、私はここの住人さんってのなんだ！ 私のことはココアって呼んでくれたら嬉しいな！」

……この国はあれなのか？ 外国式なのか！？ 誰か日本名いないのか！？

「私は、山梨れな。こことは違う世界からきたの。信じられないでしょう？」

「あはっ、全然信じられるよ、れなちゃん」

「信じられるなんて貴女は凄いわね」

「凄い……んじゃないよ！ 普通なんだよ？ えへへ」

「ココア、っていったわね？ 暇ならここの案内頼んでいい？」

「もっちのろん！ ちょうど暇だったんだよね」

よかった。

何とかいい奴に出会った。これでいろんな秘密とか知ればいい……そして戻るんだ。

「ねーねー、れーなー」

「何よ」

「れなのいた世界ってどんなところ？」

「んー……。空気が汚くて、人がみんな冷たいところ。んでもって人口が都心に行くほど増えてく」

「人、冷たいの？」

そう深くつっこまれるとは思わなかった。

私はあまりこのこと知らないから間違ったことはいえない。

だけどココアみたいに、初対面でここまで優しくしてくれたってことは、ここはみんな優しいと錯覚してしまう。

ただでさえ私のいたところは冷たかった。

そう考えるとここにいるのも悪くないのかもしれないな――――

―あの人の思い出

商店街と呼べる場所に出て、ココアは小さく伸びをした
彼女の羽が揺れる

「れな、どうする何する？」

そういわれても困ってしまう
何をする、といわれても私は勝手についてきただけなのだ
どうしてそうなってしまう

「貴女は怎なのよ。私は何でもいいわ。どうせ暇なのだし」
「え、怎なの？ えへ、じゃあカフェ入りたいの、いい、かな？」

遠慮がちに投げかけたココアに思わず溜息がこぼれた
結局行きたいところがあるのだったら言えればいいのに
そんなに言いづらいだろうか？

所謂お洒落なカフェに入り、腰を下ろす
椅子に引かれた座布団が気持ちよい

「れな、れな！ 何食べる？ ココアおごる」

「そうね、パフェある？」

「パフェ、ああ、チョコパフェのこと？」

「そう、あるかしら。あるならそれを」

暫くメニューと睨めっこしていたココアが手を上げて店員を呼ぶ。
店員は私がいた世界とは違う笑顔でココアに接し、注文をとる。

うまく表現は出来ないのだが、
温もりのある笑顔、というのがいいのだろう

「ねえ、れな。あのおうちに一人で住むんだよね、怖くない？」

「怖いわよ」

「じゃあ、どうして住むの？ 怖いのに」

どうして、と聞かれても困ってしまう
確かに私は自分の家に帰りたい、第一ここがどこだかはわからない。
でも私は帰れないのだし仕方なくあの家に住まわせてもらうのだ

レイの言っていたことが脳裏をよぎる

——貴女様がここに来るのは必然の運命

必然の運命。

分らない、どうして。どうしたらこうなってしまったのだろう

「れな？ パフエ、来たよ。とけちゃう」

「…ごめんなさい」

パフエをつついて、ココアを見つめる

相変わらず幼い表情でホットケーキを見つめている

彼女も、私と同じで必然の運命で来る予定だったのか

……いや、やめよう

いつからこんなロマンチストになったのだろう
久々に雛霧に会ったからか？

だから、感化されてしまったのだろうか

私はこんなに人に感化される人だったっけかな

「……それにしても」

「うんっ？」

「凄いわね、チョコレート分量」

アイスを包む程度でいいのに、有り余るほどかけられている
こんなものを毎日食べたら確実に一ヶ月で体型が変化してしまう、
悪い意味で

「でも美味しいよ？」

「わかってるわよ」

いつの間にか、パフェと一緒に食べていたココアは笑って頬に手を
置いて、笑みを浮かべていた
私もいつかこういう風に笑えるようになるのだろうか



「ごちそうさま、美味しかったわ。代金は立て替えておいて。いつか払うわ」

「そんなんっ、いいよ。私も食べたもん」

宙を舞うように歩きながらココアは嬉しそうに空に放った

その刹那。

目の前が見えなくなる。

今まで昼だったのに、夜になっていた
目が慣れなくてちかちかとしている

「れなー、夜だー。送っていくね」

そういつて、遠くで手招きするココアのところまで走る。
ああわかった

心の隅で感じていた、ココアの懐かしさは雛霧だ
ココアは雛霧に似ている

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2029g/>

Dreaming Realism

2010年10月28日08時12分発行